

とぼりきゅうあと 鳥羽離宮跡の発掘調査

調査期間：令和2年11月 9日（月）～ 11月19日（木）
調査機関：京都市 文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課



1 発掘調査について

鳥羽離宮跡は、京都市伏見区竹田・中島を中心として広がる周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）です（図1）。鳥羽離宮は、平安時代の終わりごろ（11世紀後半）、白河天皇が退位後の住居として造営した離宮で、上皇が天皇に代わって政治を行う「院政」の舞台となりました。京都市では、この鳥羽離宮跡を特に重要な遺跡として扱い、昭和35年以後、継続的に発掘調査を行ってきました。その結果、離宮内には上皇の住居である寝殿のほか、仏像を安置する御堂や広大な池を備える庭園が設けられていたことが明らかとなりました。

今回、竹田浄菩提院町内において、住宅の新築工事が計画されたため、第156次の発掘調査を行いました。その結果、平安時代後紀～鎌倉時代（11世紀末～12世紀）の池の一部を確認することができました。

2 鳥羽離宮跡について

鳥羽離宮の造営は、白河上皇の孫である鳥羽上皇の代に至るまで、約80年にわたり造営され続けました（応徳3年（1086）～仁安元年（1166））。完成後は院御所として代々使用されましたが、貞治2年（1363）の戦火により多くの建物が焼失し、その後、衰退しました。

離宮の規模は文献史料に「百余町（1町=3,000坪）」と表現されるほど広大で、現在は東西1.3km、南北1.13kmの範囲を遺跡として認識しています。その内部は、南殿、北殿、馬場殿、泉殿、東殿、田中殿等の御所に分かれており、それぞれ寝殿と付属する御堂、庭園のほか、院に仕える貴族達の邸宅が造営されました。

なお鳥羽離宮は、歴史的イベントの舞台としても有名で、平清盛による後白河上皇の幽閉や、後鳥羽上皇による挙兵（承久の乱（1221年））も、この地でおこりました。

3 今回の発掘調査成果

今回の調査地点は、東殿と呼ばれる御所の一画にあたります。北側の隣接地では、平成16年度に発掘調査が行われており、平安時代後期の池とその汀（州浜）が確認されました。このため、今回の調査地も池の一部であることが予想されました。

掘削の結果、地表面より0.2mまで現代造成土、0.3mまで江戸時代の耕作土、0.5mまで室町時代の土層があり、これを取り除いた段階で平安時代後期～鎌倉時代の池の堆積を確認しました。池の底には厚い砂礫層があり、所々で湧水が認められました。

池の堆積からは、12～13世紀の土器片、瓦（軒丸瓦・軒平瓦）のほか、木製品が出土しました（図4）。1は、中央に孔をあけた小型の円板で、糸に縫りをかけて紡ぐ際に使う紡錘車の紡輪です。側面の成形は粗いですが、表面に放射線状の線刻が施されており、製作者の何らかの意図を感じます。2は折敷の底板で、柱目材を薄く削り出しています。3・4は曲物容器の底板で、側板である曲物を底板の周囲に装着して使用します。5も曲物容器の底板ですが、こちらは底板の上に曲物側板を装着するタイプで、図左端に円形の曲物を装着した痕跡が残っていました。また表裏面ともに多数の刃物キズが残ることから、食料などを切り分ける際に用いる俎や、作業用の敷物として再利用された可能性があります。

（黒須亜希子）

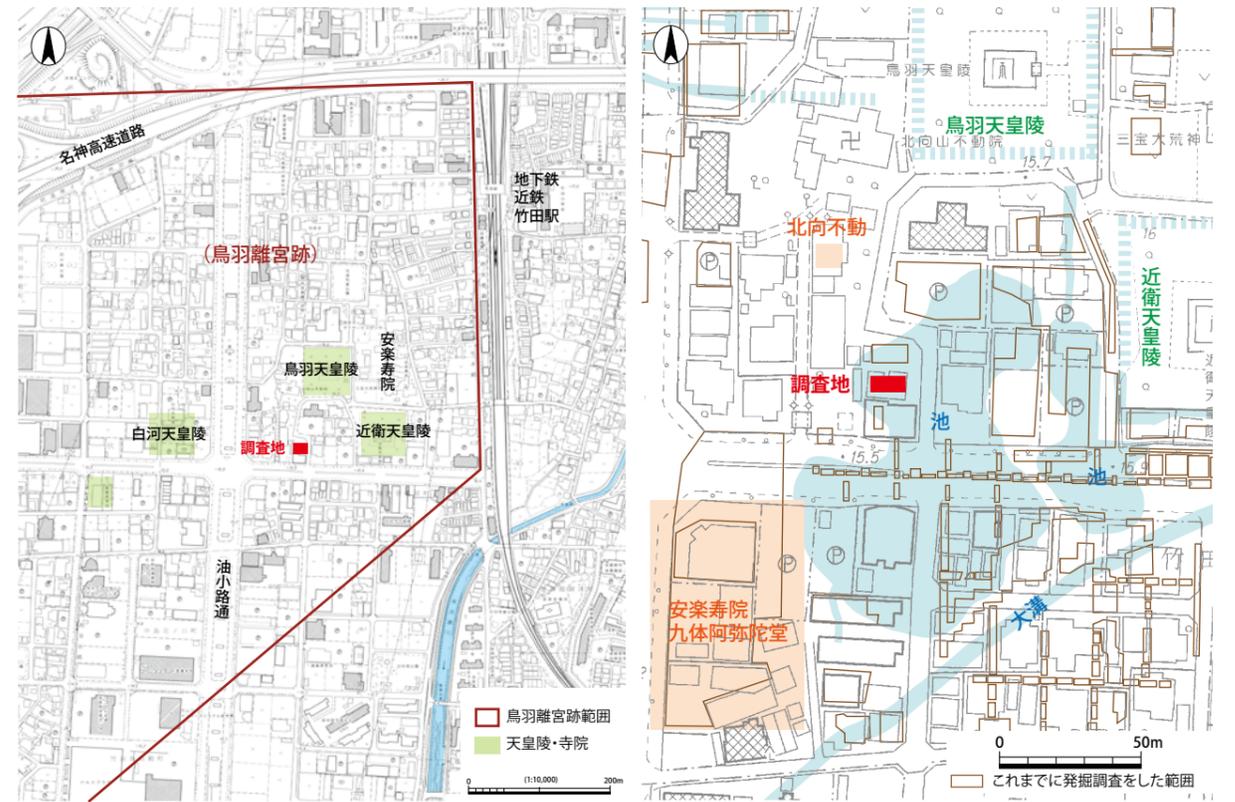
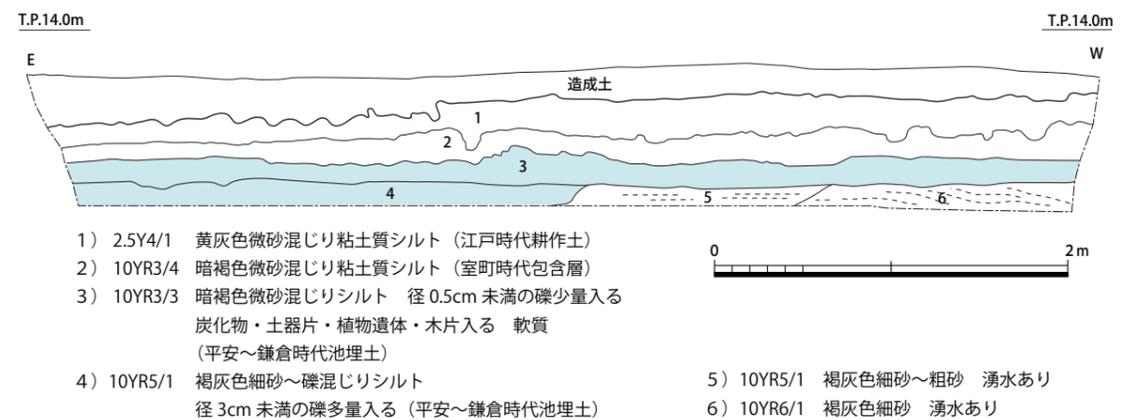


図1 遺跡位置図

図2 周辺の発掘調査成果



- 1) 2.5Y4/1 黄灰色微砂混じり粘土質シルト（江戸時代耕作土）
- 2) 10YR3/4 暗褐色微砂混じり粘土質シルト（室町時代包含層）
- 3) 10YR3/3 暗褐色微砂混じりシルト 径0.5cm未満の礫少量入る炭化物・土器片・植物遺体・木片入る 軟質（平安～鎌倉時代池埋土）
- 4) 10YR5/1 褐灰色細砂～礫混じりシルト 径3cm未満の礫多量入る（平安～鎌倉時代池埋土）
- 5) 10YR5/1 褐灰色細砂～粗砂 湧水あり
- 6) 10YR6/1 褐灰色細砂 湧水あり

図3 調査区南壁断面図

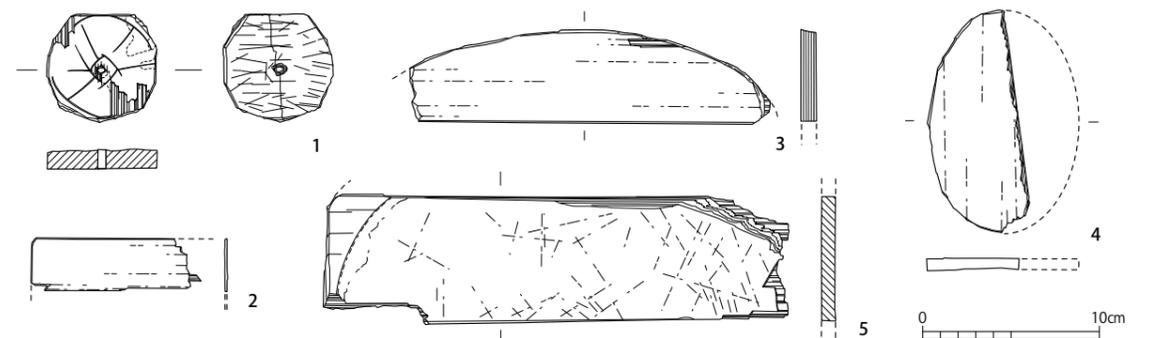


図4 池出土遺物実測図